

## DSRS-C (パールソン小児うつ尺度) の各項目に性差はあるか? -MIMIC モデルを用いた DIF 検出による性差の予備的検討-

上田純平<sup>1)</sup>、瀧井美緒<sup>2)</sup>

- 1) 新潟医療福祉大学 健康スポーツ学科
- 2) 岩手県立大学 社会福祉学部

【背景・目的】 DSRS-C (パールソン小児うつ尺度) は、村田ら (1996) によって作成された、我が国において最も多く使用されている児童青年を対象とした自己記入式の抑うつ症状を測定するアセスメント尺度である (石川、2011)。判別精度の高さから、一般対象者の子どもに対するスクリーニングにおいては DSRS-C が最も推奨されている (佐藤ら、2009)。特に近年では、児童青年に対する抑うつ予防的介入のアウトカム指標として用いられることも多くなっている (例えば、佐藤、2009)。

DSRS-C は、18 項目 2 因子で構成され (佐藤・新井、2002)、複数の研究において高い信頼性と妥当性が確認されている (例えば、佐藤・新井、2003)。性差は、小学生の合計得点では女子が有意に高く (佐藤・新井、2002)、中学生の「抑うつ気分」因子では女子が有意に高いと報告されている (永井、2008)。しかし、これらの研究では、各因子および全項目の合計得点を基に検討されており、性差がみられた項目を個別に確認することは不可能である。加えて、小規模サンプルの介入研究において合計得点や因子間に性差がみられていない報告もあり、DSRS-C の性差についてはより詳細な検討が必要だと考えられる。

さらに、心理尺度の運用に関して、特異項目機能 (Differential Item Functioning: DIF) に注目が集まっている。DIF とは、広い意味で項目の働きの違いを見いだすということから、項目バイアスよりも中立的であるとされ、能力が同一であるにもかかわらず、所属する集団の違いから、正答率 (反応確率) に差が生じる項目と定義される (渡辺・野口、1999)。日本ではこれまで項目バイアスや DIF への関心はそれほど高くなかった (熊谷・脇田、2003)。DSRS-C における項目バイアスや DIF に関しては、並川ら (2011) が小学生と中学生の発達の变化の検討を行っているのみであり、性差については DIF を検出し、検討されていない。

DIF を検出する方法の一つとして、MIMIC モデル (Multiple Indicator Multiple Cause Model) が挙げられる。MIMIC モデルとは、複数の観測変数によって構成概念が規定され、その構成概念が別の複数の変数に影響を与えているモデルである (豊田、2007)。MIMIC モデルは DIF の検出にも有用な手法とされている (NIH、2013)。

これらを踏まえ本研究では、上田ら (2016) の二次分析として MIMIC モデルを用いた構造方程式モデリングにより DIF の検出を行い、DSRS-C の各項目における性

差を予備的に検討することを目的とする。

【方法】 調査対象者：地方大都市近郊の中学校 1~3 年生、計 619 名を対象に質問紙調査を実施した。回答に不備のあった者を除いた、577 名 (男子 289 名、女子 288 名、年齢不明 5 名、平均年齢 13.76±0.92 歳) を分析の対象とした。調査材料：フェイスシート (年齢・性別)、DSRS-C (村田ら、1996)。DSRS-C は、18 項目からなる質問紙であり、回答は 3 件法 (「0. そんなことはない」「1. ときどきそうだ」「2. いつもそうだ」) で評定を求めた。上田ら (2016) では、他の尺度も実施しているが本研究の分析には用いていない。倫理的配慮：本研究は二次分析であるため、上田ら (2016) に準ずる。また、本研究に際し開示すべき COI 関係にあたる企業等はない。

【結果】 DSRS-C の各項目に、属性変数からのパスを設定し、MIMIC モデルを用いた構造方程式モデリングによる検討を行った。修正指数 4 以上かつ改善度指標を考慮し、DIF の可能性のある項目をそれぞれ 3 項目抽出した (表 1)。

表 1 DIF の可能性のある項目

因子	因子名	項目番号	項目
F1	活動性および 楽しみの減退	9	いじめられても自分で「やめて」といえる (R)
		11	やろうと思ったことがうまくできる (R)
		13	家族と話すのが好きだ (R)
F2	抑うつ気分	3	泣きたいような気がする
		10	生きていても仕方ないと思う
		18	とても退屈な気がする

(R)は反転項目

属性変数からそれらの項目へのパスを追加し再度分析を行った。その結果、適合度指標の改善がみられた (表 2)。

表 2 パス追加前後の適合度

		GFI	AGFI	RMSEA	SRMR	AIC
F1	追加前	.929	.893	.082	.0590	257.741
	追加後	.955	.928	.066	.0434	193.234
F2	追加前	.947	.912	.086	.0487	176.699
	追加後	.959	.923	.080	.0398	154.929

【考察】 本研究により、中学生データにおける DSRS-C には DIF が存在する可能性が示された。しかし、適合度指標の改善は僅かであった。その理由として、サンプルの小ささが起因している可能性が考えられる。今後はサンプルサイズを拡大したより精緻な検討が期待される。

【結論】 中学生が回答した DSRS-C において、性差のある項目は存在する。

### 【文献】

- 1) 上田純平、瀧井美緒、富永良喜：学校現場での集団抑うつ予防教育に活用できる認知の誤り尺度の作成，教育実践学論集，17，85-91，2016。